

明治・大正時代の夜叉ヶ池探検

保科英人*¹

要旨：明治・大正時代に愛知県内で発行された新聞に、同時期の夜叉ヶ池探検の記事が掲載されている。本稿では、新聞記事を資料として、当時の探検の様子を概説した。

キーワード：探検、夜叉ヶ池、福井、明治時代、大正時代

Hideto HOSHINA *¹. 2023. Yashaga-ike Pond Exploration in Meiji and Taishô periods. Ciconia (Bulletin of Fukui Nature Conservation Center) 26:207-210.

Key words: exploration, Yashaga-ike Pond, Fukui, Meiji period, Taishô period

はじめに

夜叉ヶ池は福井県南越前町と岐阜県との間の県境近く、標高約1100mに位置する池である。同池は、固有種にして種の保存法対象種であるヤシヤゲンゴロウ *Acilius kishii* Nakane, 1963 が生息することで知られる(保科・井上 2005, 保科・井上 2006)。

古来、夜叉ヶ池はその自然環境よりも、竜神に代表される様々な伝承が着目されてきた(今庄町文化財協議会 1989, 野津博子ゼミナール 1993, 揖斐川町 1997)。作家の泉鏡花(1873-1939)が戯曲『夜叉ヶ池』を発表したのは大正2年3月である(泉 1942)。

神秘のイメージに覆われた夜叉ヶ池であるが、既に江戸後期の文政期には夜叉ヶ池の絵図が作成されている。この頃には、既に人が池に立ち入っていたことは明らかである。明治16年には湖北の前田俊蔵と言う名の農民が、夜叉ヶ池に登ったとの記録もある(石原 1991)。夜叉ヶ池は江戸後期の時点で、前人未到の地ではなかったのである。

南条郡の地誌をまとめた『福井県南条郡誌』との書物がある。本書は大正11年に256頁分が印刷された。その後も編纂は続き、残りの頁が印刷されたのは昭和9年である(南条郡教育会 1975)。この『福井県南条郡誌』によると、「近時夜叉ヶ池探検など盛に行はれ」とあり、大正後期から昭和戦前期にかけて、夜叉ヶ池を目指す人々が少なくなかったことがわかる。

明治・大正時代の夜叉ヶ池探検

筆者は近代名古屋における虫狩りの実態調査のため、明治・大正・昭和戦前期の愛知県内発行の新聞を

調べたことがある(保科 2021)。その過程で、明治42年(1909年)と大正3年(1914年)に実施された夜叉ヶ池探検の記事を偶然見つけた。本稿にて、当時の探検の様子を概説することにしたい。

①明治42年の夜叉ヶ池探検

明治42年の夜叉ヶ池探検は、新愛知、名古屋新聞(ともに現在の中日新聞の前身)、扶桑新聞で2回に分けて記事になった。掲載年日は3紙いずれも同年6月7日と9日である。記事は小見出しを除くと、内容はどの新聞も一字一句ほぼ同じで、隊員が語った談話が掲載される形となっている(注1)(注2)。

探検を執行したのは、岐阜県の大垣青年登山會である。彼らは越前、近江、美濃の3ヶ国の境にある夜叉ヶ嶽、三國ヶ嶽、地藏ヶ岳の踏破を目指し、6月1日に出発した(注3)。ただし、何らかのアクシデントが発生したようで、一行は目標を夜叉ヶ嶽に絞った。3日朝6時半、一行は案内者を伴い、揖斐郡廣瀬村川上を発った。現在、岐阜県側からの夜叉ヶ池登山は、福井県側登山口と比較すると、なだらかなコースとされるが、当時はそうではなかった。揖斐川の急流を渡ること50回余り、川の深さは腰にまで達したところもあった。また、7日付名古屋新聞の小見出し「積雪今尚丈餘」とあるように、積雪が残っており、登山は困難を極めたと言う。さらに、大木と絶壁が一行を阻んだ。一行が夜叉ヶ嶽の下(もと)に達したのは3日正午である。その後も登山を続け、一行は目的地である夜叉ヶ池に到達した(夜叉ヶ池に着いた日時は、残念ながら記事中には見えない)。一行は、紅、白粉など7種の化粧品を土盃に入れ、池に浮か

* 連絡・別刷請求先 E-mail: hhoshina@f-edu.u-fukui.ac.jp

¹ 福井大学教育学部 〒910-8507 福井県福井市文京 3-9-1
Faculty of Education, University of Fukui, Fukui City 910-8507 Japan

べて、伝承にある夜叉姫に供えた。一行は案内人を岐阜県側に帰し、自分たちは今庄方面に向かって、山を下りた。下り道も難所の連続だったらしいが、記事には「夜叉ヶ嶽探険外なれば略す」（字ママ）とあり、詳細は記されていない。一行が大垣に戻ったのは、6月4日である。

②大正3年の夜叉ヶ池探検

大正3年7月17日付新愛知は「夜叉ヶ池探険」（字ママ）との通知を掲載した。明治42年の夜叉ヶ池探険については、新愛知は隊員の談話を掲載しただけだった。しかし、今度は自ら登山隊を組織しようと言うのである。実は、大正3年の春、新愛知は作家・大橋青波の「夜叉ヶ池」を連載したが、それが読者に好評を博していた。それが登山隊結成の起因の一つである。

7月17日付通知によると、読者から隊員を募集して、記者を含めた探検隊を結成する。そして、探検隊を岐阜と福井の2つの方面に分け、8月上旬に登山を執行する、とある。探検隊員募集の通知が新愛知に掲載されたのは、7月21日である。通知には(1)募集隊員は5名、(2)探検隊費は5円、(3)募集締め切りは7月25日、(4)名古屋出発は8月1日とする、(5)日程は1日目に揖斐町内で宿泊、2日目は揖斐町川上で宿泊、3日目は夜叉ヶ池で露営、4日目は揖斐町内で宿泊、5日目に名古屋で解散、とある。なお、探検隊には記者と写真班数名が同行すること、また、地元村役場や警察署からの情報により、福井方面からの登山については道が険しく危険甚大である、として断念した旨も記されている。

大正初期の大工の日当は1円余りである（森永2008）。5日間の日程で5円支給されるので、隊員は大工と同じ給料が貰えることになる。しかし、この5円は、汽車賃と宿泊料、露営経費込みの給金である。人夫賃その他の雑費は新愛知の負担だったとはいえ、多くは実費で消えたはずだ。金儲けにならないどころか、自弁する登山装備等を勘案すると、下手をすれば赤字である。

にもかかわらず、人々は殺到して隊員に志願した。募集期間はたった5日間だったが、応募者は最終的に405名に達した。競争倍率なんと80倍である（7月26日付新愛知）。新聞社側は選抜に苦心したようだが、実業家の加藤平四郎以下5名が隊員として採

用された。新愛知で「夜叉ヶ池」を連載した大橋青波も隊員に加わることも決まった（8月1日付新愛知）。

隊員決定の後、新愛知は探検隊の行程に変更を加えた。堀江越南記者を福井に派遣し、一度は断念した福井方面からの登山をやはり試みる、と言うのである。大橋を隊長とする岐阜からの美濃本隊に対して、堀江には越前支隊との名称が与えられた。越前支隊は8月1日に名古屋を出発、今庄を経由して、3日に夜叉ヶ池で美濃本隊と合流する計画である。

8月1日午前5時半、名古屋を出発した美濃本隊は、7時20分に廣神戸駅に到着した。停車場では、町長や郵便局長などの大歓迎を受けたそうだから、ちょっとしたお祭り騒ぎである。一行は、付近の由緒古蹟を回ったのち、宿泊地の揖斐町へ向かった。一方、越前支隊の堀江は11時30分に鯖江着、夜叉ヶ池の縁故者の中村九良右衛門と面会し、夜叉ヶ池にまつわる伝説のヒヤリングを行っている（8月2日付新愛知）。中村は人夫とともに、堀江に同行して、夜叉ヶ池登山に挑むことになった。

8月2日、美濃本隊は揖斐町を出立し、久瀬村南横山を経て、宿泊地の川上長昌寺に向かった。美濃本隊が川上村に着いたのは、午後7時である。村長や区長、駐在所の巡査なども登山に参加することになった。さらに、揖斐や大垣から同行希望者が続々と川上村に集まったので、30人を超える大所帯となってしまった。8月4日付新愛知は、村の様子を「川上村開闢以来の大賑ひを呈しつつあり」と記す。一方、鯖江を発った越前支隊は今庄を経由して、夜叉ヶ池ふもとの岩谷に向かった。ここが2日目の宿泊予定地である。今庄は快晴で、8月3日付新愛知は「暑気酷烈なり」と記す。地元民は越前支隊に「岩谷から夜叉ヶ池に至る道は非常に困難だ」と不安があったが、一行はすこぶる元気であったと言う。

8月3日はいよいよ夜叉ヶ池登山の日である。美濃本隊は午前6時半、川上長昌寺を出発した。8人の人夫に野営設備と食料を運ばせた。溪流を渡ること30回余り、一行の腰より下はことごとく濡れた。当日は追い打ちをかけるかのように、時折雨に見舞われたそうだから、ますますずぶ濡れである。角度85度くらいの急坂をよじ登ったこともあった。大橋青波隊長は石に足を滑らせ、頭をあわや巨石にぶつけそうになった。様々な難苦を乗り越え、一行全員が露営地である夜叉ヶ池に到着したのは、同日午後4時

である。越前支隊も無事池に到着しており、両隊は湖畔で握手した（8月6日付新愛知）。

越前支隊の方は、3日の10時半には既に夜叉ヶ池に着いていた。岩谷から4時間の道のりであった。もっとも、美濃本隊と正午に池で合流する予定だったので、緩々と登った結果であり、通常なら岩谷から3時間で着く距離であったと言う（8月14日付新愛知）。

8月4日、探検隊は朝5時起床、7時に夜叉ヶ池を出発。同日午後5時、川上長昌寺に帰着した。美濃本隊は往路9時間半、帰路10時間かかったことになる。揖斐川町役場のホームページによると、現在岐阜県側からの登山時間はわずか1時間半なので、まさに雲泥の差である。美濃・越前の両隊が名古屋に戻ったのは、5日午後7時50分である（8月6日付新愛知）。

夜叉ヶ池探検は大きなけが人もなく、無事成功したわけだが、後日談がある。夜叉ヶ池伝承を劇にして、帝國座にて上演することが決まったのである（8月24日付新愛知）。劇「夜叉ヶ池」の初日は8月31日で、大道具大仕掛けにて雨を降らせ、座前には夜叉ヶ池山中の景を作った（8月28日付新愛知）。劇「夜叉ヶ池」は大好評で、初日から満員御礼が続いた（9月3日付新愛知）。新聞広告を見る限りでは、少なくとも9月11日まで帝國座で上演していたことは確実に（9月11日付新愛知）、その後、多治見町榎元座でも上演された。ここでも満員盛況であったと言う（9月18日付新愛知）。

明治・大正期の夜叉ヶ池探検記事の着目すべき箇所

以上、明治42年と大正3年の夜叉ヶ池探検の様子を概説した。記事から着目すべき点をいくつか列記して、本稿を終えることとする。

①ヤシャゲンゴロウに関する目撃談はなし

明治42年6月9日付名古屋新聞によると、大垣青年登山會の隊員は「池中に生息するイモリの多き事、世人の云ふアマゴの居るや否やは知るによし無かりき」と語っている。現在の夜叉ヶ池にはイモリが多く（保科・井上 2006）、明治時代に同地に入った隊員がイモリを目にしたのは当然である。また、大正3年の探検隊は夜叉ヶ池で露営した際、「蛙と井守の啼く音を聞くのみ」（8月6日付新愛知）と、モリアオガ

エルの声も聞いていた。一方で、明治・大正の両探検とも、ヤシャゲンゴロウを思わせる昆虫の目撃談は一切ない。隊員たちの視界にヤシャゲンゴロウが入っていたのは絶対確実であるが、彼らは生物調査を目的として登山したのではない。ようは、水生昆虫は隊員たちの関心外だったので、記事として残らなかったのである。

また、現在、夜叉ヶ池では陸水魚は確認されていない。これは戦前も同じ状況だっただろうが、明治末に池にアマゴがいるとの噂があった点は興味深い。

②「夜叉ヶ嶽」との名称

福井県今庄方面から登山道に入ると、「夜叉ヶ池まで〇km」との標識がいくつかある。しかし、よその山でよく見かける「〇〇山山頂まで〇 km」との看板とは異なり、標識に山の名前は書かれていない。それもそのはず、夜叉ヶ池が位置する山の正式名称は存在しないからである。「夜叉ヶ池山」との名称が使われることもあるが、俗称にすぎない。一方で、明治42年の新聞記事に「夜叉ヶ嶽」との山名が使われていることは、特筆に値する。今後、仮に山名を正式に定めるとの議論になれば、「夜叉ヶ嶽」は一つの候補としてよいだろう。

③大正3年の夜叉ヶ池探検記事は打ち切られた？

大正3年の夜叉ヶ池探検は、新聞社の新愛知が企画実行、そして自社の記者を派遣している以上、関連記事が多く残されたのは当然である。しかし、池の水生動物に対する記録が極めて乏しいことは、本章①で述べた通りだ。同年8月8日から美濃本隊の大橋青波と越前支隊の堀江越南による「夜叉ヶ池探検行」との連載記事が始まった。そこでは池の伝説や遺跡、道中の地形、登山の苦勞が綴られているものの、池の中の生き物に対する記述はほぼ皆無である。やはり、彼らは夜叉ヶ池の水生動物には興味がなかったとしか言いようがない。

それでも、二人の連載が続いていれば、いずれはヤシャゲンゴロウらしき昆虫に記述が及んだかもしれない。しかし、不幸なことに、8月15日付新愛知は「夜叉ヶ池探検行」の連載を中断すると告知した。その理由は同年7月末に開戦した第一次世界大戦である。時局紛乱となり、呑気に探検記事などを掲載できなくなった、と言うわけだ。

「夜叉ヶ池探険行」の連載は、その後再開されたのだろうか。新愛知はデータベース化されていない。よって、再開の有無を確認したければ、大正3年8月以降の同紙の紙面を順次閲覧していくしかない。筆者の調査はそこまで進んでおらず、「夜叉ヶ池探険行」が8月15日で、完全に打ち切りとなったのか否かは不明である。

(注1) 現在では、複数社の新聞の紙面に、ほぼ同じ文面が載ることはまずない。しかし、明治・大正期は、別々の新聞社が1人の情報提供者の談話をそのまま採用し、その結果同一の記事として掲載されることがたまにあった。

(注2) 愛知県3紙そろって夜叉ヶ池探検を報じたとの事実は、夜叉ヶ池探検は当時大きなニュースだったことがうかがえる。当然、地元岐阜県でも、それなりに話題になったであろうが、明治42年6月上旬の岐阜日日新聞（現在の岐阜新聞の前身の一つ）は、不運にも東京大学明治新聞雑誌文庫と国立国会図書館に保管されておらず、閲覧できなかった。岐阜県図書館には、明治期の岐阜日日新聞のマイクロフィルムが相当数あるが、同館のフィルムを動かす機械は記事探索に向いていない仕様なので、調査を断念した。

(注3) 新聞記事には出発地の記述がない。ただし、記事中に「(一行は)4日帰垣」との文言が見えるので、大垣を出発したとの理解でよいか。

引用文献

- 保科英人. 2021. 近代地方都市の螢狩, (II). 名古屋篇. さやばねニューシリーズ, (44): 1-10.
- 保科英人・井上友美. 2005. ヤシヤゲンゴロウの現状 (I). 甲虫ニュース, (152): 13-21.
- 保科英人・井上友美. 2006. ヤシヤゲンゴロウの現状 (II). 甲虫ニュース, (153): 11-19.
- 揖斐川町編. 桑原隆一 文・絵. 田中正敏監修. 1997. 絵物語美濃の雨乞い伝説夜叉ヶ池. 揖斐川町, 岐阜. pp. 63.
- 今庄町文化財協議会編. 1989. 夜叉ヶ池の伝説. 今庄町文化財協議会, 福井. pp. 18.
- 石原傳兵衛. 1991. 夜叉ヶ池説. 一信仰と伝説一. 旭クリエイト, 岐阜. pp. 99.
- 泉 鏡太郎. 1942. 鏡花全集 25 卷. 岩波書店, 東京. pp. 709.
- 森永卓郎監修. 2008. 明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典. 展望社, 東京. pp. 477.
- 南條郡教育会編. 1975. 福井県南條郡誌(復刻版). 名著出版, 東京. pp. 1488.
- 野津博子ゼミナール編. 1993. 伝説「夜叉ヶ池」の系譜. 伝承文化の継承と創造. 滋賀県立短期大学 幼児教育学科野部博子ゼミナール. 滋賀. pp. 144.